

ある人が、世に處し、人と交はる上に、必ず心得居るべきと也。
 英俊の士より見れば、世の中には、間抜けが多かるべし。されど、元來世には愚物多きがあたり前也。而して、世の仕事は、この愚物を相手とせざるを得ざるとなれば、英俊の士は、齒痒く思ふと多かるべけれど、おもりが小兒を遊ばせるやうな氣になり居らざるべからず、をどすこともあれば、すかすともあり、時には心にもあらぬ馬鹿げたる真似して見せるともなかるべからず。それが出來ずば、如何に英俊なるも、成功するを得ざるべし。古來俊傑の士にして、往々轆轤不遇に終るものあるは、おもりしながら、利口ぶらんするによる也。

つとむる時には、嚴格にして眞面目なれ。嬉戯する時には、むしろ馬鹿げて小兒らしかれ。いつも利口より、道德家ぶるは、吾人與みせず。

五三 衣食の憂

同胞四千萬人中、絶えて衣食の憂なきものは、極めて少數なるべし。大多數は、たゞ衣食に追はれて、五十年の一生を終るなり。衣食は、もと小事也。されど、その人に取りては、命の次に大事なるもの也。人のために、國のために、いかばかり心配すとも、さばかり人を弱らせるものにあらざれど、たゞ衣食

の憂は、そのいたみ骨髓に入る。俗諺に、貧すりや、鈍するよ云へるは、切言なりと云ふべし。衣食の憂なくして、國事に心配するものは、老いても、たつしや也。顔の色つやもよし。色氣もあれば、食ひ氣もあり。一方に衣食の憂あるも、一方に國家の心配あれば、さまで老いぼれざるもの也。たゞ國家の心配をひさうくるやうな地位を得ずして、衣食の憂のみある人は、心配の數少なくて、よかるべきも、實際は然らず、早く老朽するもの也。國家の心配も、苦しきには相違なきも、直接に我身に痛痒を及ぼさぬと多く、及ぼすも、食なくして餓み、衣なくしてふるへるほどには切ならず。我名譽に關し、我地位に關し

て、死ぬるよりも苦しきとあるべけれど、その代りにまた張合もありて、心配するわりには、身も、心もよわらざるもの也。例へば、なほ山にのぼるが如し。苦しけれど、平地より上にゆく也。衣食の憂は、之をなくなした處が、人並になつたといふまで也。名譽でもなければ、張り合もなし。もし衣食する能はざる場合には、我身も、妻も、子も餓死せざるべからず。我身は自業自得とあきらむるも、闇にあらねど、子故に迷ふ親心、子を十分に教育する能はざるだに、我死ぬるよりも苦しき思あるべし、衣食の憂は、例へば、井戸の底より、はひ上るが如し。はひ上りたりとて、平地にいつるまで也。到底平地より山にの

ぼらむとするの比に非ず。

衣食の憂を、甚しく氣にして、萎縮するやうな人にては、到底事業は出来ざるべし。されど、衣食の憂といふものは。馬鹿にはならぬもの也。長官と意見あはぬ場合に、男らしく辭職したきも、妻子を路頭に迷はすとかと、我を折りて、俸給にかじりつく官吏もあるべし。その他、衣食の爲めに、志を枉ぐると、一々數ふべからず。

人は或る程度までは、衣食の憂あるがよし。若くしては、爲めに奮起心を起し、長じては、それに驅られて、事業に勵精す。その度をすぎせば、人をして卑屈ならしむ。腰辨當の連中、豈

に生れて卑屈なるものならむや、たゞ境遇上、卑屈ならざるを得ざる也。二三年遊びて居ても、食へるだけの貯蓄あらば、男子の意氣地を貫く上に、都合よきこと多かるべく、學問をなすにも、事務に執るにも、心強く思はるべく、我身には安心を得人には禮をかゝず、卑屈なる事をせず、社會に濶歩するを得べし。それにつけても、人は幼時より貯蓄心を養ひ、儉素を守りて、金錢を浪費せざる習慣をつけておきたきもの也。

五四 俗 交

今の人、淡たる君子の交を解せず。濃き小人の交を求む。その

人に求むるや、餘りに多し。金に求め、才に求め、氣合に求め、情誼に求め、同郷に求め、同學に求め、求めて足らず、終に恩を賣りあふ。而して酒や、色や、よく此が媒をなす。其濃きものは、濃きにつれて、恨あり、不平あり、一朝相反目す。やからざるものは、路傍の人の如し。余は信ず、自から高うするも、人を凌がず、人を恕すると、己を恕する如くし、利を求めず、恩を賣らず、來るものは拒まず、去るものは追はずして、はじめてよく君子の交に達したるものと云ふべし。

余の如き讀書生が、妄りに社交に愛嬌をふりまくべきに非ず。都を出て、片田舎に住へるは、さらさら世の交をさけむとに

もあらず。賢愚の別こそあれ、同じ社會の人也。乞食すると、盗すると等、悪事の外は、何でもあつさあひ申さむ。

五五 肝膽相照す

肝膽相照すといふとは、たゞ非凡なる人傑同士の上へのみ見るを得べし。到底之を世の才子同士に覓むべからず。まして婦女子には、古來決して之なき事也。才子や、婦女子や、大に賢ならずして、小利口也。神經あまりに敏也。小利害にさとき也。一身の毀譽損得をあまりに氣にする也。疑ふかさ也。邪推多き也。曲解多き也。小名譽心に富む也。報酬の念盛也。故に衝突

多し。利に合する間は親しきも、利去れば、忽ち相反目す。人を見るの明なし。故に己に媚ぶるものを以て、我に好意あるものとなし、苦言するもの、誠心を悟ること能はず。非常なる人傑に至りては、炯眼よく人を見る。己れを空しうして、人を容る。毀譽、損得、報酬以外に超脱して、義を重んじ、人情を察す。妄りに怒らず、妄りに恨まず。人を責むるよりは、むしろ己れを責め、己を恕するが如くに、人を恕す。是に於て肝膽相照すを得る也。

人心の異なるは、その面の如し。然るに、世人はよろづ己と同じきものを得て、親友とせむとす。これ木に縁りて魚を求む

るが如し。肝膽相照すとは、全く質氣の同じきの謂に非ず。管仲と鮑叔とは、肝膽相照せり。故に管仲こそくして、利をみづから多く取りしも、鮑叔之を咎めず、仲の貧しきを察すれば也。仲戦敗れてにげしも、叔以て怯となさず、仲に親あるを察すれば也。世俗は必ずや思はむ、鮑叔は管仲に馬鹿にせられたるなりと。これ世俗の心を以て、曲解する也。そのやうな根性にては、到底肝膽相照すとは出来ざる也。西郷南洲と勝海舟とも、肝膽相照したりしが如し。世俗或は曲解して云はむ、南洲は海舟に馬鹿にせられしなりと。南洲豈海舟が胸中を看破し得ざらむや。看破して後、之に許して、疑はず。おだてに乗りたる風

をなして、國家百年の大計を畫す。この間の消息は、小智小慧、小毀譽を苦し、小利害を氣にし、世俗の前に利口ぶらむとする才子輩の能く解する所ならむや。

五六 死人の事業

死せる孔明、生ける仲達を走らしめけりとかや。世もし人は生きて居る間にのみ事業をなすものなりと思はゞ、とんでもなき誤解也。人は生前事業をなし、死後また事業をなす。殊に非命の死は、場合によりて、最もよく事業をなすもの也。

源頼朝は、生前、幕府を開けり。その後繼、わづかに、二代

にして亡びたれども、その志は、北條氏つげり。足利氏や、織田氏や、豊臣氏や、徳川氏や、みな其風を聞きて起ちたる者也。即ち鎌倉時代以後、七百年間の幕政は、頼朝の事業なりと云ふも可也。

孔子の事業に至りては、更に一層偉大也。生前は七十國を遊説するも用ゐられざりしかど、其教は傳りて後昆を化せり、支那のみならず、孤島の日本にまでも及べり。二千年後の今日に至りて滅せず、今後永劫、人類の存在する間は滅せざらむ。

大小の差別こそあれ、かゝる類は、一々數ふるに遑あらず。詩人や、學者や、文人や、美術家や、軍人や、實業家や、宗教

家や、政治家や、頭角を露はして、ひと仕事なしたるものは、死後なほ事業をなす。人の形骸は朽つるも、精霊は死せず。こゝに精霊といふは、形骸以外のその人也。宗教的の意味をふくむ靈魂の謂にはあらず。數ふるもわづらはしけれど、紫式部は死せざる也、馬琴は死せざる也、徂徠、仁齋は死せざる也、秀吉は死せざる也、雪舟、探幽は死せざる也、傳教、弘法は死せざる也。

あはれや、世俗はたゞ死を恐るれども、死したるが爲めに、百年生きのびて爲すよりも、更に大なる事業を爲すとあるを知らざるべからず。菅公にして九州に謫死せざりしならば、恐ら

くは、文學の神として、千古に廟食せざりしならむ。楠公もし湊川に討死せざらば、世人の同情と尊敬とをうくると、今日の如くなるを得ざらむ。磔殺せられし耶蘇、佐倉宗五部、毒を仰ぎしソクラテス、その非命の死の爲めに、天下後世を動かせること如何ばかりぞや。

明治の世、殊に惜むべきは、板垣伯が往年岐阜の難に死せざりしと也。非命に死せよとは、常識にはづれて、不人情此上もなきやうなれど、個人的私情をはなれて達觀せよ、あそかれ、早かれ、人は死ぬる者也。四十年が夢ならば、七十年八十年も同じく夢にあらずや。殊に板垣伯は徒に死を惜む俗人とも思は

れず。もし當年板垣伯が刺客の刃に斃れたるものとすれば、主義に殉じたる也。板垣は死すとも、自由は死せずと云ふが如き奇抜沈痛なる遺言は、古今東西、未だ曾て聞かざる所也。この立派なる言を遺して主義に殉じたらば、天下後世の志士を動かす、楠公の討死にもまさりしならむ。死の價值も亦大ならずや。

五七 事業の裡面

事業の表面には、之を代表する人傑あり。されど、其裡面に

は、幾多無名の人才あらざるはなし。時にその名あるも、代表者に蔽はれて、さまで赫々たらざる也。例せば、大江廣元の源頼朝に於けるが如し。幕府創立の表面にたてるものは、頼朝也。頼朝をして幕府を創立せしめたるものは、廣元也。頼朝、廣元をつかへる乎。廣元、頼朝をつかへる乎。未だ俄に判すべからず。されど、廣元の如きは、幸にして名のあらはれたるもの也。名の現はれずして終りたる人物、偉人の成功の下に頗る多き也。事業大なれば大なる程、多くの人力を要す。如何に非凡の偉人なりとも、己れ一人の力にて、細大のこらず、之を爲し得べきに非ず。また己れ一代にては、その事業直ちに消滅するとな

きを保せず。必ずや後繼者を要す。古來名の後世に傳はれる學者を見るに、著述あるか、もしくは、すぐれたる門人あるか也、釋迦にても、耶蘇にても、よき弟子なかりしならば、その道は、恐らくは、後世に傳はらざりしならむ。徳川幕府も、三代の家光が愚物なりしならむには、或は賣家と唐様で書く三代目の非運に陥りしかも知るべからず。殊に歴史上には、全く黒幕の中に没了せる人傑が、境遇上、その上に立てるものを輔けてしぼり出せる智慧も策略も全くその代表者の名に歸し、かくてその代表者は、幾多無名の人傑の力量と己れの力量とを合せる集合躰を己れ一人の如くに見なされて非常に悉らく思はるゝ也。あ

はれや、幕下のものは、よしや實際の力量は、代表者以上なりとも、功名全く代表者に奪ひ取られ、或は多少の功名あるも、代表者の如くに赫々たらず、守成の難きは、創業の難さにゆづらざれど、後繼者の名は、終に創業者に如かざるが常也。

お山の大将我れ一人との念は、兒童の時よりも盛なるもの也。二雄並び立たず、他をたふしてなりとも、己れ獨り舞臺を專領せむとし、むしろ鶏口となるも、牛後とならず、他の幕下となりて、所謂椽の下の力もちをなすを欲せざるは、人情の常にして、一應は無理ならぬ事也。然れども一考するを要す。境遇の如何、時勢の如何、運命の如何によりて、到底代表者の地位に

立ち難き場合多き也。又一考するを要す、さまで名は實よりも重きものなる乎。人生の眞の目的は、事業也。名はぬけがら也。名實あはせ得るは、悪しきにはあらねど、事業の實あれば、名はあるも、なきも、觀ずれば同一也。俗人は實なきも、名を欲す。達人はたゞ實を名めて、名を求めず。一生の事業、徒に埋草となり、もしくは椽の下の方持となりて、歴史の表面には花々しき痕跡をのこさざるも、顧みて大悟せよ、良心に對してやましからず、天地に俯仰してはづかしからず、長へに瞑目するを得べき也。

絶
た
し
き
痕
跡
を
の
こ
さ
ず
る
も
、
顧
み
て
大
悟
せ
よ
、
良
心
に
對
し
て
や
ま
し
か
ら
ず
、
天
地
に
俯
仰
し
て
は
づ
か
し
か
ら
ず
、
長
へ
に
瞑
目
す
る
を
得
べ
き
也
。

五八 反 省

反省せよ、凡人をして賢人の域に近づかしむるは、それ唯反省の功乎。

反省とは、われと我身を顧ると也。たとへば、人に侮辱せられたるとありとせむ。其侮辱を加へたる人に向つて、恨むにあらずば、則ち怒る。これ人情也。誰も平氣では、居らざるべし。平氣で居るものは、朽木也。物の用にたつべき人に非ず。恨むは、なほ活氣あり。怒るは、更に活氣あり。怒つて鐵拳を加ふるはなほ一層面白し、されど、なほ更に進みて反省せよ、われ

は○何○故○に○悔○辱○を○加○へ○ら○れ○た○る○乎○と○反○省○せ○よ、か○く○反○省○す○れ○ば、
 我○身○の○缺○點○を○さ○と○ら○む。缺○點○を○さ○と○り○て○之○を○改○め○む○と○つ○と○む○れ
 ば、智○惠○も○生○ず○べ○く、賢○人○と○な○り○得○べ○く、悔○辱○は○自○か○ら○な○く○な
 る○べ○し。

人は誰もみな自惚あるもの也。人の悪いときには、氣がつくも、
 我身の悪いときには、氣がつかず。人を責むると嚴にして、己れ
 を責むると寛なるもの也。殊に幼時より小才のきくものは、な
 ほ更自惚のつよきものにて、何事も己れのするとは、よしと思
 ひ、他のするとは駄目也と思ふなり。氣にくはぬ事あれば、す
 べて之を人の罪に歸して己れの足らぬより起れりとは、氣付か

ず。かゝれば、缺點はいつまでたちても缺點也。その人物も、
 智惠も、絶えて進歩せざる也。世の小才子が小才子にとゞまり
 て、賢人となり得ざるは、畢竟するに、小才を恃みて、毫も反
 省せざるに由る也。之に反して、魯鈍なりし人が、小才子の域
 を素通りにして、案外に賢人に近づくは、畢竟するに反省して、
 過を改めむとつとむるに由る也。

「人を責むる如くに己れを責むれば、賢人とならむ。己を怨す
 る如くに、人を怨すれば、君子とならむ。我が知れる人、幼に
 して神童といはれしとかや。長じては、才子也。老いては益小
 才子也。小才を恃みて、智ふかゝらず、一生の事業すべて失敗

に終はれり。晩年に及びて、一事をなさむとす。余に謂つて曰く、某に相談せしに、あやぶみて、可と稱せず。蓋し彼は、早已に老耄せり。共に事を談するに足らずと。嗚呼これ彼が小才子に終りて、大成せざりし所以也。某があやぶむの裏面には、その人の力量を信用せざるの意もれり。その事をあやぶむに非らじ。然るに、それと察せずして、大事を取りすぎるものとなし、我身の信用なきとをさとらず。憫れむべき哉。

反省せば、智自から生ぜむ。』さは云へ、人は或る程度までは、自惚にまかせて妄進する必要がある也。反省に過ぎ、我缺點が餘りに明かになり、怖氣つきなば、活氣なくなりて、志業萎縮す

べし。一方には自惚より來れる抱負あり、一方には反省より來れる智慮ありて相提携して進まむことを要す。

五九 智ありて正直

人は先づ智ありて正直ならむことを期すべし。智と云へば、正直も自から其中にふくまるれど、こゝには智力の働をさす也。學問をなすと、事業をなすと、仕事をなすと、それ／＼智力の種類は異なれども、何よりも先に必要なるは智力也。智識は讀書と經驗とより得らるべけれど、智力は讀書經驗以外、生れ付きにも基く。然し生れ付き智あるものも、讀書經驗にてみがき

上げずんば、所謂女さがしうして牛賣りそこなふ小智小才となりはつべし。小智小才にして、正直の美德を失はゞ、仕末にへぬあばずれものとなるべし。男も女も小才子とはなるべからず。賢人とは、小才子の域を通り越したるもの也。小才子よく世間一般をごまかし得べきも、賢人を如何ともする能はず。賢にしてはじめてよく世に濶歩するを得べし。之を要するに、智力は活動する所以の要具也。而して誠實は活動の道その正しきを得る所以の要具也。智少し足らざるも、誠實ならば、以て六尺の孤を托すべし。智十分なるも、誠實を缺かば、以て百里の命を寄すべからず。全く智のなき愚直は、間には合はざれど、

なほ用ゐる所多し。全く誠實のなき小智は、人を害し、世を害するのみならず、終に自から害すべし。愚なるよりも、却つて劣れり。嗚呼、智ありて正直、これ萬人の學ぶべき人物の標準也。而して毫も虎を畫いて狗に類するの弊を見ず。孔子是也、諸葛孔明是也、和氣清麀是也、管公是也、楠公父子亦是也。

六〇 權 謀 術 數

誠實なる哉、古人も、巧詐は拙誠に如かずと云へり。されど、世には變多し。變に應ずるには、權道なかるべからず。要するに、心はあくまでも誠實なるべし。手段としては、權道に由ら

ざるを得ざる事あり。大石良雄が世の嫌疑をさぐる手段として、青樓に流連せしが如きも、實に止むを得ざる也。宋襄の仁、尾生の信、必ずしも嘉すべきに非ず。余は事業をなさむとする人に向つて、孔孟の書を讀まむことを勸むると共に、韓非子を讀まむことを勸む。今その説林の中より十箇條を摘載して、以て参考に資す。

一

湯王既に桀王を亡しけるが、天下の己れを言ひて貪となすを恐る。よりて天下を務光に譲らむとす。されど務光の之を受けんことを恐る。人をして務光に説かしめて曰く、湯王、主上を

殺して、惡聲を君に傳へむとす。故に天下を君に譲るなりと。務光之を聞きて、身を河に投じて死せり。

二

子胥難をさけて奔りしが、邊境の斥候に捕へられたり。欺いて曰く、主上の我を索むるは、わが持ちし美玉を得むと思ひ給へば也。然るにわれその玉を紛失せり。主上の前に引出されむには、止むを得ず、汝が之を着服したりと云はむと。斥候之をゆるせり。

三

子圍、孔子を商の大宰に紹介す。孔子出でたる後、子圍問ら

て曰く、孔子に逢ひて、如何にか感し給へるぞと。大宰曰く、孔子は大人物也。孔子を見て、汝を視れば、蚤虱の細なるもの如し。われ孔子を主上に紹介せむと。子圍、孔子が主上に重んぜられむこと恐る。大宰に謂つて曰く、主上もし孔子を見給はむ、君を視ること、矢張り、蚤虱の如くならむと。大宰、孔子を主上に紹介することを見合せたりき。

四

紂王、長夜の飲をなし、月日を忘れむとす。その左右に問ふに、みな知らず。箕子に問はしむ。箕子その徒に謂つて曰く、天下の主となりて、一國みな日を失ふ。天下それ危し。一國み

な知らずして、われ獨り之を知る。われそれ危しと。王に答へて曰く、臣も酔ひて、今日の何日なるかを知らずと。

五

魯丹、三たび中山の君に説きたれど、容れられず。よりに、五十金を散じてその近臣に贈れり。かくて中山の君に見えしに、非常に機嫌よく、ねんごろに饗鷹せり。魯丹出て、舍にかへらずして、中山を去れり。その御者怪んで問うて曰く、中山の君かく御身を優待しけるに、何故に去り給ふぞと。魯丹曰く、人の言によりて我を優待するやうな人ならば、また必ず人の言によりて我を罪せむと。未だ境を出でざるに、公子、これ趙の

間者なりと讒言しければ、中山の君之を信じて捕へて罪せり。

六

宋の富賈に、監止子といふものあり。人と百金の璞玉を争ふ。監止子如何にもして之を得むと欲し、過つて取り落したる風に見せかけて、その璞玉に玼をつけたり。他の争ひし人、玼のつきたるを見て断念せり。監止子百金にてその玼のつきたる璞玉を買ひて歸りて、その毀瑕を理めて、千鎰を得たりき。

七

晋の中行文子、出奔して、縣邑を過ぐ。従者曰く、此處の嗇夫は、君の故人也。君なんぞ休舎して、後車の來るを待たざる

と。文子曰く、われ音を好む、この人、われに鳴琴を贈れり。われ佩を好む。この人われに玉環を贈れり。斯くわれに容れられむことを求むるものなれば、恐らくは、われを以て人に容れらむことを求むるならむと。立ちよらずして去りけるが、果して、文子の後車二乗を捕收して主君に献ぜり。

八

伯樂、その憎む人に、千里の馬を相することを教へ、その愛する人に驚馬を相することを教へたり。千里の馬は時に一つ、その利緩し。驚馬は日に售る。その利急なり。これ周書に所謂下言にして上用するは、急なれば也。

九

植赫曰く、刻削の道、鼻は大に如くなく、目は小に如くなし。鼻の大は小にすべく、小は大にすべからざる也。目の小は大にすべく、大は小にすべからざる也。事を擧ぐるも亦然り。その必ず復すべきものをなせば、事敗るゝこと寡き也。

十

鄭の人に一子あり。その子將に家を去り出で、仕へむとす。その家に謂つて曰く、必ず壞墻を修築せよ、然らざれば盜賊忍び入らむと。近隣の一人も亦此事を云へり。然るに修築せざりしに、果して盜難に遭へり。家人、その子を智ありと褒め、近

隣の人の同じ事を言ひたるものをば、盜賊ならむと疑へり。

六一 負 債

學生諸子は、多くは未だ負債の何たるかを知らざるべし。されど大學生ぐらゐになりては、往々負債に苦しめるものあり。社會に出で、は、負債をなすもの益多し。折角の人才も負債の爲めに淪落し果てしもの、余の知人にも其人に乏しからず。惜しむべき哉。かくて高利貸、長へに世に榮え、世に跋扈す。歎すべき哉。

むかしは、千兩借金すれば、祝ひをせしとありきとかや。今

にても、借金なきものは、働なきものとするの風なしとせず。借金も借金によると也。財産なきかもしくは乏しきものが、大に事業をなさむとすれば、是非負債せざるべからず。かゝる借金は、その人の働さあり、世に信用あるを證するものにて、多ければ多き程、事業が大なるべし。されど、収入のみにては一身一家がたちゆかざる場合に、高利貸の手にかゝる負債は、多ければ多き程其人に累をなすもの也。獨逸の諺に、ボルゲン、ゾルゲン（借金、心配の意）の言あり。我諺に、借金しにゆくものは、苦勞しにゆくものなりと云へると、同じ意也。かゝる負債の多きを誇るは、われ竟にその何の意たるを知らず。

尤もかゝる負債も、或は不時の災難ありて、或は一家の厄介多くして、或は知人親戚の窮状見るに忍びず、一片義侠の念止むを得ずしてなせるものは、なほ怨すべき點あり。されど、人にはいつ災難あるか測り知りがたきものなれば、豫め之に備へざるべからず。厄介多くして一家の經濟が不如意なるは、まことに氣の毒也。されど進んで収入を多くする工夫をめぐらし、退いて己れに克ち、慾を抑へ、儉約に儉約すれば、或は負債なくともすむべし。己れは、毫も贅澤せずしてたゞ人の爲めに金をつひやし、窮を援ひ、陰徳を施して、よろづ義理ばるが爲めに、一家に餘財なく、終に止むを得ず負債する人も少なからず、其

心は殊勝なれども、人をすくはむとして、後には却つて人にすくはるゝに至るは、全く感心すべきとに非ず。或る場合には、男子の意氣地、人をさきにして、己を後にせざるべからざるとあるも、平生の心掛けは、まづ己れが人に援けられざるやうに覺悟して、然る後に人をたすくるやうにすべし。

こゝに最も氣の毒なるは、連印をおしゝばかりに、他の負債をしよひ込みたる人也。或は恩人の爲めに、或は止むを得ざる事情の爲めに、それも止み難きとあるべし。されど、筋のわるき負債には、決して連印すべからず。すべて、連印する以上は、己れが拂ふものと心得居らざるべからず。

一家の經濟か下手にて、つゆ奢りたるとをせざるも、なほ負債を免れざるものあり。惜むべきにはあらねど、なほ不心得也。速に之を改むるの方法を講ぜざるべからず。

同情を表し難きは、身分不相應に張りすぎ、奢りすぎたるよりに起る負債也。更に憎むべきは、遊蕩その他筋のよからぬとに濫費したるに基づける負債也。而して負債の多數は、かゝる種類のものなることを慨かはしけれ。殊に學生の身にして、かゝる負債をなすは、何たる不心得ぞや。

六二 毀 譽

何人も、ほめられて快からざる、毀られて不快ならざるは無
 けれども、その毀と譽にも、それ／＼種類あり。我が本領と
 せざるものを毀られても、さまで痛痒を感じざるもの也。我が
 不得意とする者を譽められては、却つて冷汗が出づるもの也。千
 人の凡人の譽めは軽くして、一人の知者の譽めが重き也。生前
 一時の譽めよりは、身後千載の譽めが大切也。更に進んでは、
 生前身後、世に誤解せられて汚名を被るとも、我良心に對して
 疚しからず、世に向つて立派なる事をなしたりと自信すれば、
 紛々たる世上の毀譽以外、何來の稱賛の聲、自から耳に聞ゆる
 心地する也。

さるにても憫れむべきは、世上凡俗の徒也。彼等は餘りに一
 身眼前の小毀譽に醒観す。一寸褒らるれば、忽ち揚々として鼻
 を高くし、一寸惡口言はるれば、忽ち活氣を失ひて萎縮す。か
 くては、とても思ひ切つた事が出来るものに非ず。文人にして
 名を得れば、唯其名を失はむとを恐れ、惡口言はれざらむと苦
 心し、一寸したる小品にてごまかし、精力をそぎたる大作を
 出さむとする元氣もなくなりて、早く老朽するもの多し。何ぞ
 その小膽にして女性的なるの甚しきや。初學の士が、文法にの
 み苦心すれば、筆のびずして、面白き文が出来ざるが如く、文
 人がたゞ瑕なからむと苦心すれば、思想も筆力も自から縮まる

べし。文事以外の事業にありても、また然る也。思へ。瑕あるは、なほ進境ある也。瑕はわざ／＼苦心して去らずとも、年と共に文老いなば、瑕自からなくなりて、天品玲瓏の域に到るべし。その域に達するまでには、瑕多きこそよけれ。従つて毀譽紛々たるも、何ぞ意に介するに足らむや。

一身の小毀譽を氣にするとは、男子よりも女子が甚しく、人物よりも小才子が甚し。世には、事業の實を得むよりは、名譽の虚を得むとし、生前の譽、身後の名を博せむとし、自から口にし、筆にし、自から我傳記の材料をととのへ置き、手下をつかひ成るべく人に知れぬやうにして百方苦心して我名を傳へ

むとするもの少なからず。かくて其人の名あらはれて、本人は、それにて得意なるかは知らねど、わかつた者の眼より見れば、洵にかたはら痛み次第也。もとより名譽は貴重なるもの也。されど、名譽よりも實功の方が更に貴重也。苟くも實力實功ありて、我志を世に貫かば、其身は黒幕の中に沒了するも可也。男子何ぞ必ずしも山の大将となりて、始めてゑらしとなさむや。裸百貫、これ男子に尙ぶ所也。門地により、閥閥により、爵位により、黄金により、部下の手腕によりて、世に虚名を負ふとも、良心果して能く満足する乎。陋なる哉、世の小才小智の徒、盲目千人の世の中に、小名譽を得むとし、智者の後に笑ふを知ら

ず。猿猴が水中の月を捉へむとするの愚と相距ると幾何ぞや。
 世の小利口なるもの以爲へらく、己れ如何に實力ありて、實
 功を收むるとも、名之に伴ふなくんば、所謂椽の下の方持ち
 也。馬鹿々々しき話ならずやと。成程小利口なる者より見れば、
 馬鹿げたる事なるべし。されど、退いて靜に大觀せよ、人はた
 い名の爲めに働くべきものに非ず。我志を事業に伸ばすとを得
 れば、名は無能力の統袴子に譲りても可也。自から名の加はる
 なれば、必ずしも之を拒むを要せざれども、強ひて之を得むと
 するは頗る陋なる哉。世には聖人君子の如く見せかけて、その
 實、名譽の餓鬼なる者、少なからず。その名譽を博せむとする

手段、世俗にこそ知れざれども、知る人ぞ知る。顧みて汝の良
 心に耻ぢよ。

六三 絢爛の極

絢爛の極、平淡に歸すとは、文章のみならず、人物も亦然る
 と也。小才士、小策士、なま學者は、なまじひにつくりかざり
 て、往々痕跡をあらはせども、大賢達人の域に至れば、毫も痕
 跡なく、渾然として玲瓏、無邪氣にして、いや味なし。これ絢
 爛の極、平淡に歸せる也。彼の無邪氣なる野人小兒と似たる所
 多けれども、これは、無意識にして、自然にこゝに到れる也。

彼れは意識ありて、練磨を経て、こゝに到りたる也。

大賢達人、才を弄せざるに非ず、されど其才、非常に大也。術數なきに非ず、されど其術數、非常に巧み也。故に其才は、却て愚に近く、其術數は無卮氣也。聖徳ありて、容貌愚なるが如き君子、豈に眞に愚ならむや。

何事も痕跡あるは、技の未だ到らざるもの也。文然り、畫然り、人物も亦然る也。才華燦爛たるは、畢竟するに、其技未だ老いざる也。

されど、絢爛より平淡に進む途に、岐路あり。私意を挾んで進めば、小人となり、奸物となり、姦雄となる也。公共の觀念

に富んで私曲を離れてこゝにはじめて、聖人となり、君子となる也。

六四 悟とは何ぞや

枯木冷灰となることが悟りならば、われ悟るを願はざる也。われに情あり、慾あり。情と慾とあるまゝにわれは大に活動せむと欲す。もはや活動する能はざるの域に達すれば、それ迄也。いさぎよく死して、浮世に思ひを残さざるまでの事也。傳ふらく、西行は、愛子を椽よりつき落して、出でて遁世せりと。男子義の爲めには、妻子を捨てざるを得ざる場合もあるべし。「妻

臥病床「兒泣飢」をも見捨て、國家の爲めに、起つて洋夷を拂はざるを得ざる場合もあるべし。されど一身の不平の爲めに、妻子を見捨るに忍びざる也。「力拔山氣蓋世」の項羽、もとより我身の死を惜むが如き未練者に非ず、その泣くや、虞姫の爲めに泣く也、亦可ならずや。

人もし慾を没し、情を没すれば、所謂迷はなかるべし。安心も得られむ。その代りに、活動もなき也。その人は、即ち枯木冷灰也。かゝる人の住む社會は、色もなく、花もなし。黄茅白葦の瘠土也。

吾人は、大に迷はむことを欲す。枯坐することを能はざれば

也。されど、世の中は、なるより外にはならざるを知る。悟りに執着するの非なるは、迷ひに執着するの非なるが如し。人力のあらむ限りをつくして、運に甘んじ、あきらむべき所はあきらめて、未練を言はず愚痴をこぼさざれば、大丈夫の所爲たるを失はざるべし。

涙なきことが、必ずしも悟れるに非ず。わが身の爲には泣かざるべきも、人の爲には泣くべし。世の爲めには泣くべし。人情を没却して一種の不具者となりて悟り顔するは、われ與みせざる也。

六五 斷雲錄五十四則

●達すれば、窮したる時の事を思ふべし。金を得れば、囊中無一物なりし時の事を思ふべし。過なく、後悔なきを得む。

●人に恩を施すことを、路傍に小便するぐらゐに思ふべし。

いつまでも之を覚え居りて、報酬を望まば、不平多からむ。甚しきは争を起さむ。

●世に恐しさものなし。たゞ恐しさは、氣違ひ也。次に愚人也。次に廉耻心なき者也。次に女也。

●涙は必ずしも常に人を動かすものに非ず。人情の癡痺した

るもの多ければ也。

●人情の癡痺したるものは、必ずや意志強く、理性發達す。理を以て之を壓すべし。もしくは、利を以て之を誘ふべし。

●事業を爲すに、或る程度までは、情は禁物也。情もろくしでは、事を斷行する能はざれば也。されど、情なくんば、大に成功する能はず。或は事に成功するも、人に失敗せむ。

●世人の大部分は、涙に動く。故に遊女は空涙を以て、客をだまし、偽君子偽豪傑の輩は、偽善を粧うて世を瞞着す。馬脚あらはれずんば幸也。

●才長け、能長けたるもの、必ず事に成功せむ。されど、か

る輩は、往々己を知つて、人を知らず、己を恃んで、人を見ず。恐らくは、人に失敗せむ。

●人には情あり。泣くもよし。義に泣くべし。一身の不幸に泣くべからず。怒るもよし、義に怒るべし。一身の不平に怒るべからず。よしや、下りて、一身の不平に怒るとも、力と地位とあるものにして、はじめて怒るべし。力と地位となきものが、妄りに怒らば、反て侮られて、怒は益加はらむ。

●小人と少女とには、いつも涙のみを見せるべからず。時には陽に赫怒せざるべからず。撫づべきときに撫で、なぐるべき時になぐれば、女子服し、小人服す。

●人に下るは、人を使ふ所以也。材能を恃んで、自から高ぶる者は、却つて人に利用せられむ。

●腕力を持つものと腕力を争ひ、才智あるものと才智を競ふもよけれど、われ少しばかり優れたるぐらゐにては、人、われに服せざるのみならず、却つてわれをそねむべし。われ非凡なるに至りては、或は我に服せむ。普通勇あるものを服せむには、智を以てすべし。智ある者を服せむには、徳を以てすべし。

●あらゆるものに競争あれども、徳には競争なし。勇者は勇者と競争すれども、徳あるもの、決して徳あるものと競争するとなし。有徳者には、道德家も服し、不道德家も服す。

●勇者は下層に活動せざるを得ざるべし。智者にいたりては、中層に活動す。徳あるものにして、はじめて萬人の最上層に立つを得む。

●人間萬事、誠實が主也。巧みなる虚偽は、俗人をごまかすべし。されど、識者は爪弾させむ。

●悪口する者を憎むべからず。必ず善根の人也。

●我にちやほや言ふものに、うかと心を許すべからず、多くは我に求むる所ある人也。

●人に愛せられるも、侮らるべからず。人に憚られるも、敬して遠ざけらるべからず。

●角力に勝たば、敵手の身體の砂をはらひてやるべし。勝つた上にもふみつければ、世の同情を失はむ。

●強きものを壓せむには、つよく出るべし。やさしきものを壓せむには、やさしく出るべし。

●大に窮したる時に、人を救ふべし。少しばかり窮したる時に救ひたればとて、人はさまで難有くは思はざるべし。韓非子に曰く、危を持するの功は、亡を存するの徳の大なるに如かずと。是也。

●事は、情に始まりて、情に終る。之を貫く所以は智也。

●小才の利きすぎる者は、成るべく愚にならむとを力むべし。

大に愚なるは、即ち大に賢なる所以也。

●竹や、簇生せずんば、必ず風に折れ、雪に折る。松柏や、ひとり高山の上に立ちて、獨り亭々たり。

●人の爲めに成るものは、また人の爲めにやぶる。人によりて立身せしものは、また人によりて零落す。

「地位を得るに敏なるものは、地位を失ふにもろかるべし」

「●義と利とは、多く兩立せず。古來、小人時めき、正義の士窮する所以也。」

●小兒は大鐘をならす能はず。世の愚衆、偉人の偉なる所以を知り得べくもあらず。たゞ雷同するのみ。

●世の萬人にほめられよりは、一人の賢人にほめられむに如かず。

●世の萬人の非難は、恐るゝに足らず、一人の賢人の非難を恐しけれ。

●夜間多く吠ゆる犬は、必ず怯なる犬也。

●多言ひわけする人は、多く疚しき所ある人也。

「言ひにくき相談は、思ひ切つて、面會して言ふべし。手紙なれば、言ひ易し。されど、斷られ易し。」

●人のおだてに乗るは、愚の極也。されど、心には何事も承知し居りて、表面には、ある程度までは、おだてに乗つた風す。

るも、人を利用する所以の一なりと知るべし。

●世話にならむとする時は、泣きつくやうに、哀願し、世話して貰へば、香として、何等の音沙汰もせぬが、世人の常也。世話したるものも、俗人ならば、心中暗に不満なるべし。俗人はたゞ己れの都合よき事のみを圖らむとす。感情の衝突絶えざる所以也。」

●世に憎まれ役なるは 歴史家、新聞記者、検事、批評家。これらの人は、たゞ正理に生死すべし、世の感謝と憎悪とは、度外に付せざるべからず。

●善事は隠れ易くして、悪事はあらはれ易し、殊に虚名を好まずして、自から吹聴するを嫌ふ人には、かくれたる善事頗る多し。

●俗人の常情、他が善事をなすも、そねみこそすれ、つゆ喜ばざるものぞかし、他に缺點ありて、悪口言はれたる時は、心自からうれし、否、好んで他の悪事を吹聴するもの也。」

●人の善を嫉むものは、悪人也。人の善を羨む者は、猶小人也。人の善を喜ぶに至りて、始めて君子也。」

●才は使はるゝ也。智は使ふ也。徳は使ひ使はるゝ以上に、自から貫目を有す。

●己れを持するには、小心なるべし。人を待つには、大量な

らざるべからず。

「小仁に拘泥する者は、大に仁なる能はざるべし。小恥に忍ぶ能はざる者は、大なる榮譽を得ざるべし。」

「真理は中庸に在り。されど、社會を改革せむは、常軌を逸したる奇傑の快手腕を待たざるを得ず。社會の革命兒は、中庸のみを守る君子には非ず。」

「大に迷はずんば、大に悟る能はず。大に疑うて後、はじめ深き智識を得べし。」

「人に長たるものは、外、痴にして、内、敏ならざるべからず。人に使はるゝものは、外、敏にして、内、痴ならざるべからず。」

らず。

「一生人につかはれて、それで甘んずるものは、膽力あるを要せず。雅量あるを要せず。たゞ小才ありて正直なれば足れり。」

「小才あるものは以爲へらく、世人はみな馬鹿也、世の中をごまかすは、何でもなき事也と。憐れむべし、内心には大に輕蔑せられ居るを知らず。愚なる哉。」

「おとなしくして、惡をなさぬは結構なるとなけれども、惡に抵抗するの勇氣なくては困つたもの也。かゝる人は、味方としてたのものからず、もし人の上に立たば、弊害百出せむ。」

「我所信を貫かむが爲めには、人の憎惡をさくべからず、更

に一步すゝみて、我が一命をかけて決行すべし。然らずんば、到底大事業は出来ざるべし。

●大策は、策なきに似たり。大智は、智なきに似たり。大忠は、忠ならざるに似たり。

●幹の高さ樹は、根必ず深し。枝のひろがれる樹は根必ずひろかる。

●水、瓶に満つれば、ふれども音なし。小人を用ゐるの法、他なし。唯利を興へて飽かしむるに在り。しかすれば、叩いても、なぐつても、おとなしきと、處女の如き也。

●腦は冷かなるべし、理を判すれば也。胸は熱すべし、情を

やどせば也。

●人を恕すべし、されど己れを恕する莫れ。磊落なるべし、

されど粗笨なる莫れ。淡泊なるべし、されど冷淡なる莫れ。温

和なるべし、されど柔懦なる莫れ。無邪氣なるべし、されどぼ

んやりなる莫れ。注意深かるべし、されどこせくする莫れ。

小心なるべし、されど小膽なる莫れ。果斷なるべし、されど獨

斷なる莫れ。氣前はよかるべし、されどおだてに乗る莫れ。悔

悟すべし、されど愚痴をこぼす莫れ。氣骨あるべし、されど威張

る莫れ。ひろく人を容るべし、されど妄りに人を信ずる莫れ。

豫

告

大町桂月君著

(近刊)

女學生訓

全一冊
美本

處世訓に次て出版する者本書なり卷中には社會に於ける女子に對し其歩行、服裝、頭髮、化粧、用語、文章、職業、料理、結婚、撰夫、母たるの心得、一家の經濟等を桂月先生獨得の文筆を以て縦横指導啓發せられし者請ふ出版の日を待ち玉へ

博文館發兌

明治卅六年五月廿一日印刷

處世訓

明治卅六年五月廿四日發行

定價金貳拾五錢

著者 大町芳衛

發行者 大橋新太郎

發行所 東京市京橋區本町三丁目八番地

印刷者 石川金太郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

株式會社 秀英舍

著作
所有

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

著君月桂町大 士學文

(九版) 訓生學

大町桂月先生曩に道德實踐法の著ありて道德の大綱を説かれ今又此著ありて青年學生の學問と躬行とに資せらる説く所奇警にして着實而かも趣味ありて乾燥なる小言の比にあらず文章は精勁にして流麗普通文の好模範也學生諸君一本を備へて坐右の銘とせざるべからず教育家亦參考に供へられて可也

袖珍 正郵 價貳拾四錢 全壹冊

(三版) 續學訓生

青年學生諸子の友となりて、學藝上、實行上、教導し、忠告し、訓戒するもの、學生訓是也。續學生訓出でて、更に一の益友増したり。言ふ所氣が利きて穩當、文趣味ありて雄健、一讀たゞ終り易きを惜む。苟も志ある者の机上此書を缺くべからず

袖珍 正郵 價五拾四錢 全壹冊

著君月桂町大 士學文

(四版)

一 簞 一 笠

桂月先生筆に健にして又脚に健也閑あれば則筆を載せて飄々として天下の名山大川に遊び興到りて筆を落せば筆に聲あり筆致或は勇壯或は優婉花の如き美詞となり達意暢達の佳篇となり千變萬化端睨すべからず此一篇先生の紀行を集む山や川や先生の才筆に驅られて紙表に躍動す以て臥遊の友たるべく以て練文の師たるべし天下の才人必ず讀まざるべからず

洋裝袖珍美本 正價三十錢 郵稅六錢

大絃

洋裝袖珍美本 正價三十錢 郵稅六錢

十三 韻文黃菊白菊

桂月君の文は、變顔を動かす己に久し悲慨の聲を發しては秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽淵に叫ぶが如く、句々血を吐き、字々球を綴る。靡にして沈痛優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ者の好模範となすに足る。讀書家の燈下、この絶好可憐の冊子なかるべからず。

洋裝袖珍美本 正價二十五錢 郵稅六錢

小絃

大絃急雨の如く小絃私語の如しとは、豈管に琵琶の聲のみならずや。桂月先生の此書、才氣潑瀾筆力縱横、以て普通文の模範とすべく以て作文の指南とすべし。

(第三版)

(三)

慶應義塾教授菅綠蔭君著

言行要錄(三版) 成功要錄(九版)

國の盛衰、社會の文野は、一に之を組織せる個人の言行如何に
 基し、而して、個人の成敗、國家の隆替も、亦一に吾人の日夜
 に事とする、大小の言行、之が起因本源たらざるものなし、本
 書の著者菅氏は、夙に此點に著眼する所あり、維新以來、實に
 驚くべき世變に遭遇せる、今の人が、今の社會に、處する所以
 の道、即言行の要、處世の法を示さんが爲、本書の述作を見る
 に至れり、其行文の平易にして明快、材料の斬新にして多趣味
 なるが如きは、是れ此類の著作中、近時稀に見る處の好文字た
 り、乞ふ成功要錄とともに、一本を備へて、各人各家に於ける
 座右、日夜の師友たらしめんとす。

全壹册洋拾參價正
 裝洋拾參價
 中郵稅六錢
 判美六錢
 本錢

本書は立志編處世編及び健康編の三編より成り其材料は専ら歐
 米の著書雜誌等に求め廣く和漢の諸書をも參考して現世紀の青
 年が志を立て世に處する所以の道及び之が基本たる健康保全の
 新法を説くと凡て九十有五編、今回慶應義塾國文教科用書とし
 て上梓することとなりたれば、繁簡著者に乙ふて廣く之を世に
 公にするに至れり、説述懇到文章流麗にして獨り青年立志の要
 書たるのみにあらざるなり請ふ一本を凡上の寶鑑とせられよ。

全壹册洋拾參價正
 裝洋拾參價
 中郵稅六錢
 判美六錢
 本錢

高等師範學校教諭 本田増次郎君著

處世要訓

目次

- ▲前編 ▲實務的知慧の法
- 安命知足の法
- 自修鍛練の法
- 人物の批評
- 慈善事業
- 一家の統治
- 忠告
- 秘密
- ▲後編 ▲實務家の養成
- 實務の處辨
- 代員の撰定及管理
- 依頼者の取扱
- 會見
- 評議會委員會理事會
- 黨派心
- 附錄 ベーコン論文五篇
- 親子
- 親婚と獨身
- 嫉妬
- 戀愛

本書は原著サーアーサー・ヘルプスの「匆忙餘録」なるものにして心を修
 め世に處するの要道を説きて能く肯綮に中り直に人の肺腑を衝きて一
 々感奮せしむ著者本田教授健雄明微の文筆を以て翻譯して之を公にせ
 らる一たび此書を読むもの前人未發の言あるを見るべし

文學士田中次郎君譯

飯泉規矩 三君著

●學生立身策 袖珍 壹册 正價拾貳錢

●學術自修法 袖珍 壹册 正價拾貳錢

(五)

IF5L30

故文學博士 中村正直先生譯述

西國立志編

原名 自助論

全壹冊洋裝 正價貳拾七錢

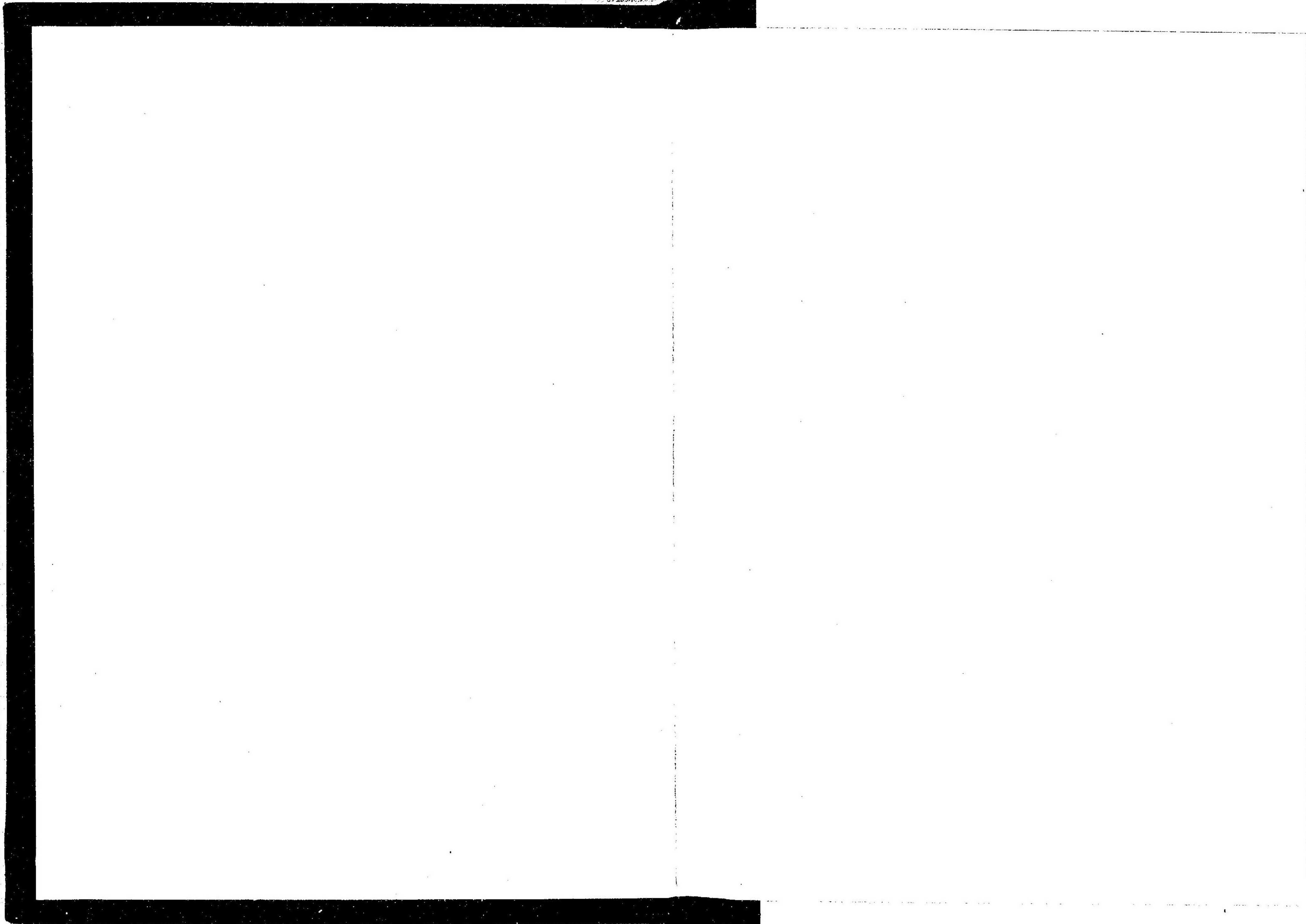
本書は其譯語の精練にして文章の謹嚴なる句々金玉、一字と雖も苟もせず古來譯書中の巨擘と徳性の涵養とに懸り當代の英俊を鼓舞して其才力を發揮せしめ化育の贊襄國運の隆昌に資したるの功甚た偉なり乃ち豈僅だ文運の進歩に裨益せるのみならずや文章は百代の大典誠に先生の此書に見るなり

陸軍中將 子爵 曾我祐準君題辭 東京女學 西田敬止君編
故衆議院議員 香月 怒經君序文 館教 授 西田敬止君編

益軒十訓

全壹冊脊皮上製 正價拾六錢

此の書は本邦教育家の泰斗たる貝原益軒先生の通俗訓蒙書類十種を編次して丁寧に校訂を加へ詳密に標註を施したるものなり其目を擧ぐれば●五常訓●大和俗訓●童子訓●初學訓●加訓●武節訓●道家訓●樂訓●君子訓●養生訓●十訓にして忠孝彝倫の大義より應對進退起居動作の末節に至るまで凡そ人たるの道教へて詳悉せざるは無し之に加ふるに道義的教育に最も熱心に節と経るに異ならず其の光輝豈管十五城を照らすのみならずや將に以て聖賢の室に入らんと昭々乎として火を睹るが如し且つ其の行文の平易流暢なるかに將に以て早く通國の軌範となすに足る世の教育に從事する諸君は勿論満天下の父兄たり子弟たる人は早く一通國の座右に備へ玉へ修身書の完璧天下また此の書の右に出づる者あらんや



1

94

139

010449-000-8

94-139

処世訓

大町 桂月/著

M36

AAE-1893



